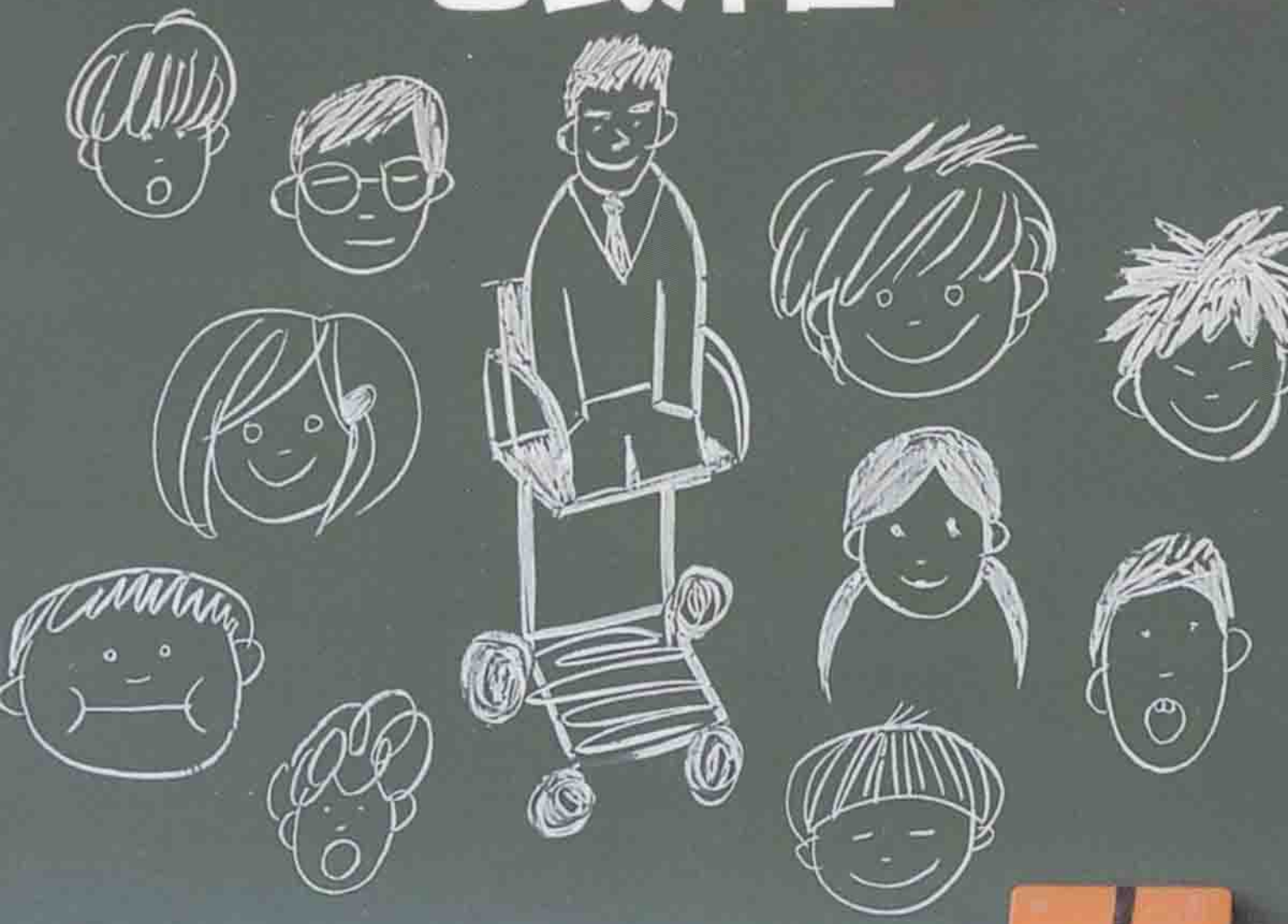
だいじょうぶ3組

乙武洋匡



講談

|著者| 乙武洋匡　1976年、東京都生まれ。早稲田大学在学中に上梓した『五体不満足』が多くの人々の共感を呼ぶ。卒業後はスポーツライターとして活躍。その後、東京都新宿区教育委員会非常勤職員、杉並区立杉並第四小学校教諭など歴任、教育への造詣を深める。また、教員時代の経験をもとに描いた初の小説『だいじょうぶ３組』が映画化され、自身も出演（2013年3月、東宝系で公開）。続編小説『ありがとう３組』も刊行された。おもな著書に『65』（幻冬舎文庫、日野原重明氏との共著）、『だから、僕は学校へ行く！』（講談社文庫）、『オトことば。』（文藝春秋）、『だからこそできること』（主婦の友社、武田双雲氏との共著）があるほか、『オトタケ先生の３つの授業』（講談社）など、子ども向けの作品も多数。また、ツイッターを通じて発信する力強いメッセージが注目を集めている。

だいじょうぶ３組（くみ）
乙武洋匡（おとたけひろただ）
© Hirotada Ototake 2012

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

2012年10月16日第１刷発行
2013年９月26日第４刷発行
発行者――鈴木　哲
発行所――株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112-8001
電話　出版部（03）5395-3510
　　販売部（03）5395-5817
　　業務部（03）5395-3615
Printed in Japan

デザイン―菊地信義
製版――慶昌堂印刷株式会社
印刷――慶昌堂印刷株式会社
製本――株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277342-3

もくじ

プロローグ　7
第一章　フツーじゃない先生　15
第二章　上ばきがない！　47
第三章　それって、ヘン？　74
第四章　ナンバーワンになりたくて　97

第五章　教授の憂うつ　140
第六章　てっぺんまで　186
第七章　「メリークリスマス」　228
第八章　みんなちがって、みんないい。　272
エピローグ　308
特別対談　国分太一×乙武洋匡　315

講談社文庫

常州大学图书馆
藏书章

乙武洋匡

講談社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

だいじょうぶ3組

もくじ

プロローグ　7
第一章　フツーじゃない先生　15
第二章　上ばきがない！　47
第三章　それって、ヘン？　74
第四章　ナンバーワンになりたくて　97

第五章　教授の憂うつ　140
第六章　てっぺんまで　186
第七章　「メリークリスマス」　228
第八章　みんなちがって、みんないい。　272
エピローグ　308
特別対談　国分太一×乙武洋匡　315

『だいじょうぶ3組』は、子どもたちにも
読みやすいように、おおよそ5年生以上で
習う漢字には、読みがなをつけました。

イラストレーション……長崎訓子

プロローグ

校庭のすみに一本だけ植えられた桜が、子どもたちを見守るようにやさしく枝を伸ばしている。薄紅色の花びらは、春の陽射しを浴びてふんわりと輝いていた。

「これより、松浦西小学校の一学期始業式を始めます」

進行役をつとめる副校長のあいさつに続いて、校長の黒木智恵子が銀色の朝礼台に上がっていく。濃紺のスーツに、パールのネックレス。整った顔立ちは、五十代を迎えたとは思えないほど若々しい。黒木は背筋をまっすぐに伸ばして朝礼台の中央に立つと、校庭にならぶ五百名を超す子どもたちの顔をゆっくりと見わたした。

「みなさんは、今日から新しい学年を迎えます。それぞれ、新しい学年としての自覚を持って――」

横を向いておしゃべりをしている子。前にならぶ友達の背中を指でつついている

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

子。手に持ったかばんを振りまわしている子。子どもたちは落ちつかない様子で、黒木の言葉など聞きながしていた。ムリもない。これから、彼らにとっての一大イベントである担任発表が控えているのだ。黒木は、内心苦笑いをして、目をつぶることにした。

全校児童で校歌を歌いおえると、黒木がふたたび朝礼台に上がった。

「では、この四月から松浦西小に来てくださった先生や職員の方をご紹介します」

その言葉を合図に五人の教職員が朝礼台の前へ進みでると、子どもたちのほうを向いて一列にならんだ。同時に、大きなどよめきが起こる。左端から二番目の男が、だれもがそうするように二本の足で立っているのではなく、いままで見たこともないマシンに乗って、ほほえんでいるのだ。

一番手として新任の若い女性教師があいさつをしたが、子どもたちの視線は別のところに釘づけになってしまっている。さっきの男が気になって仕方ないのだ。

「続いては、赤尾慎之介先生です」

子どもたちの視線を一身に浴びながら、男はぐいとマシンを前に出した。

「おおっ」

「すごい！」

短い歓声があがる。先ほどの女性教師は朝礼台の上からあいさつをしていたが、このマシンではどうにも上がれそうにない。朝礼台のわきに用意されたスタンドマイクのところまでマシンで近づいた赤尾は、座席から伸びあがるようにしてマイクに顔を近づけると、大きく息を吸いこんだ。

「みなさん、おはようございます！」

「おはようございます！」

子どもたちが元気よく返事をする。

短く刈りこんだ黒髪。なだらかなアーチを描く太い眉。意志の強さを感じさせるアーモンド形の目。ライトグレーのスーツに、この日の桜に合わせたかのような淡いピンク色のネクタイ。上半身だけがまるで宙に浮いているかのように見えるのは、ボタン操作ひとつで座席が上下する、特注した電動車いすに乗っているせいだ。いちばん高い位置まで座席を上げると約百七十センチもの〝身長〟となり、ほかの教職員とも肩をならべるほどになる。

赤尾は、あいさつを続けた。

「先生は、今日、こうしてみなさんと出会えることを、とても楽しみにしていました。これからいっしょに勉強したり、遊んだり、給食を食べたり――たくさんの思い

出をつくっていきましょう」

ひとつひとつの言葉にうなずくように、子どもたちは赤尾の言葉に耳をかたむけている。

「ただひとつ、みんなにお願いがあります」

校庭は静まりかえり、つぎの言葉を待った。

「見てのとおり、先生には手と足がありません」

赤尾が両腕を前へと突きだす。すると、スーツの袖がだらりと垂れさがり、柳のようにゆらゆらと揺れた。

「きゃっ」

「気持ち悪い」

低学年の女の子から、痛々しいまでに正直な感想がもれる。

ひじまでしかない両腕。ひざまでしかない両足。赤尾には、生まれながらにして四肢が与えられていなかった。あまりに奇妙な身体に、たいていの人は大きく目を見開いて赤尾のことを振りかえる。だが、幼いときから何百回、何千回と同じような視線を浴びつづけてきた彼には、そんな周囲の反応さえも楽しんでしまうようなところがあった。

赤尾は、にこやかに続けた。
「だから、先生にはできないことがたくさんあります。これから、先生と過ごしていくなかで、『あ、先生、困ってるな』と感じたときには、ぜひお手伝いをしてください」
最後に、晴れやかな笑顔で「よろしくお願いします」と頭を下げると、子どもたちは、ありったけの声で同じ言葉を返してくれた。

「続いては、白石優作先生です」
赤尾のつぎに紹介されたのは、白石という青年だった。電動車いすに乗った赤尾の背の高さとほぼ同じ、百七十センチ前後の身長。やさしそうな丸顔に、少しだけウェーブのかかった髪。中学時代からかけはじめた茶色いべっこうのメガネが、顔によくなじんでいる。紺色のスーツに紺色のネクタイという地味な配色は、目立つことを好まない白石の性格をよく表していた。
「ぼくは、赤尾先生の介助員としてこの学校にやってきました」
白石がそうあいさつをすると、子どもたちはふしぎそうな顔をした。
(あ、そうか……。『カイジョ』という言葉の意味がわからないのだな)

白石はすぐに説明を加えた。

「さっき先生も言っていたけれど、赤尾先生にはできないこともあります。そのお手伝いをするのが、ぼくの役目なんです」

頭の中に「？」を浮かべていた子どもたちの顔に、ようやく笑顔がもどった。白石は、子どものときから相手がどんな気持ちでいるのか、どんな不安を抱いているのかを敏感に感じとり、相手に合わせて行動することが得意だった。

赤尾と白石をふくめた教職員五人の紹介がすべて終わると、校庭の空気がにわかに変わりはじめた。副校長の灰谷慎一が、うやうやしく朝礼台に上がる。

「それでは、今年一年間、お世話になる担任の先生を発表します」

その言葉に、校庭からは一気におしゃべりやさけび声が噴きだした。「静かに。静かにしましょう！」という灰谷の呼びかけもむなしく、子どもたちが落ちつきを取りもどすまでには、しばらく時間がかかった。

「一年一組、藤川のぞみ先生」

「一年二組、……」

灰谷が一クラスずつ発表していくたび、歓声がわき、ため息がもれる。そこには、「またこの先生に担任してもらえる」というよろこびや、「ああ、ちがうクラスの担任

になってしまうんだ」という落胆など、子どもたちの素直な感情がこもっていた。

発表は、高学年に差しかかっていく。

「五年一組、青柳秀子先生」

「五年二組、紺野鷹志先生」

灰谷が、少し、間を置いた。

「五年三組、赤尾慎之介先生。介助員として白石優作先生」

いままでで、いちばん大きなどよめきが起こった。校庭じゅうの視線が、五年三組へと注がれる。それは、どこか羨望に近い色もふくまれていた。

だが、当の五年三組の子どもたちは、どんなリアクションをとったらいいものかとまどっていた。興味は、ある。なんとなく、うれしい気持ちもする。でも——。

「だいじょうぶ、なのかなあ……」

列のうしろあたりにならんでいた男子のつぶやきが、二十八名の〝ほんとうのところ〟を代弁していた。

赤尾は、そんな子どもたちの不安そうな表情を見逃さずにいた。背の高い車いすの上から、じっと五年三組の子どもたちを見つめ、彼らひとりひとりの心に届くよう、強く、強く、念じていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com